

## 倭国の方角概念と魏使の上陸地

白崎 勝

### 1、はじめに

魏使が九州に上陸した地の解明には、末盧國から伊都国に至る魏志倭人伝の記事「東南陸行五百里到伊都国」が上陸地からの方角と考えられ、これを疑義なく解明する必要がある。

私は、唐津市呼子町の呼子港に上陸したと考えている。それを検証する。

### 2、魏志倭人伝の記述

図1は、上陸地を呼子港として、そこから伊都国、奴国、不彌国、邪馬台国の有力候補地を結んでいる。

呼子港から伊都国の中心・細石神社を結ぶと、ほぼ真東にあたるが魏志倭人伝の記述は東南と記している。この方角違いは伊都国のみならず、奴国、不彌国、邪馬台国への経路すべてに及んでいる。

対馬から壱岐への渡海も、南に向かったと記しているが、図のように対馬の東端から南に進んでも壱岐の西14kmもずれてしまい上陸できない。このように陸上のみならず、海上でも方角違いが徹底している。



図1 比定地と方角

これは誤りではなく、別な基準があって一定値、偏向しているように見える。

### 3、魏使の来倭以前

これまでの研究で、当時の倭国の方角概念が見えてきた。

表1は、伊邪那美と伊邪那岐の名が、魏志倭人伝に登場するクニグニの名から一文字ずつ採った名であることを示している。伊邪那岐の伊は伊都国の伊を採っている。邪は邪馬台国の邪、那は、奴国の奴だが、本来の文字是那賀川的那であったと考える。以下は宇美町的美、壱岐の岐である。

二人の名は、倭国乱を収束させるため、クニの代表欄の「別天つ神5柱」が開いた会合で提案されたものと思われる。

名前	クニ名	クニの代表
伊	伊都国	天之御中主神
邪	邪馬台国	高御産巢日神
那	奴(那)国	神産巢日神
美	不弥(宇美)国	宇摩志阿斯訶備比古遲神
岐	壱岐国	天之常立神

表1 伊邪那美岐とクニ名

図2は当時の墓制、甕棺から出土した鉄武器の分布である。「奴国の滅亡（安本美典 1990）」より借りている。この図から倭国乱は主に、伊都国と奴国の戦いだったと考えている。

そこで互いに敵として戦った伊都国宗家の男子・伊邪那岐と、奴国の王女・伊邪那美を結婚させ、その子、天照大神（卑弥呼）を統一倭国の王とする案でまとまり、その後国生みが始まったと思われる。したがって、魏使がやってくる前は、伊邪那岐・伊邪那美の時代であった。

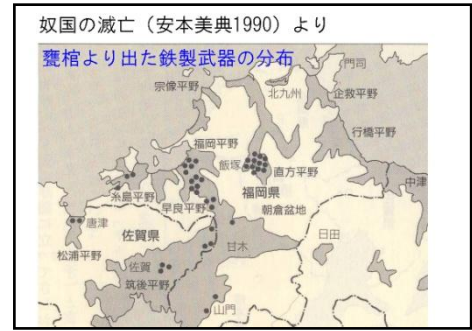


図2 倭国乱の地域

#### 4、大山祇神による大八島の認識方法

この国生みで、活躍した神に、大山祇神や海神・綿津見大神などがいる。古代の超人・大山祇神は全国大冒険の旅で、大八島の配置や形を認識していたことが分かってきた。大山という山を残していたからである。本州はもちろん、北海道や択捉島、小笠原、琉球列島の沖永良部島にも見つかると。 (図3)

この大山の配置を見ると、日本列島の形を夏至や立春の日の出方角を基準に表現していることが分かった。東日本の背骨を走る直線は、紋別まで伸びていて立春の日の出基準の、南北線であった。

本州の屈曲点が富士山であると、認識していたことも分かった。西日本の平行線は、日本海側と太平洋側の沿岸に沿ってあり、夏至の日の出方角の基準であった。

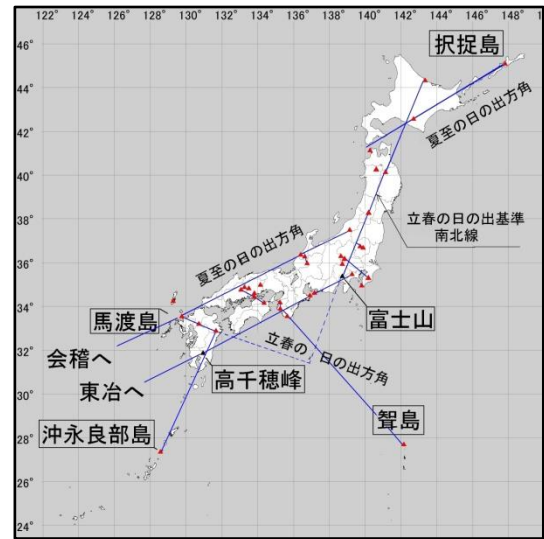


図3 全国の大山の分布

#### 5、夏至の日の出の方角基準

西日本の夏至の日の出方角は、約 62 度である。図4はそれを、カンミール3Dで確認したものである。

魏使の道案内をした倭国の人、クニの所在地を、この倭国の基準で方角や距離を説明したと推測する。魏使は測量したのではなく、聞いたそのままを倭人伝に記載したのであろう。

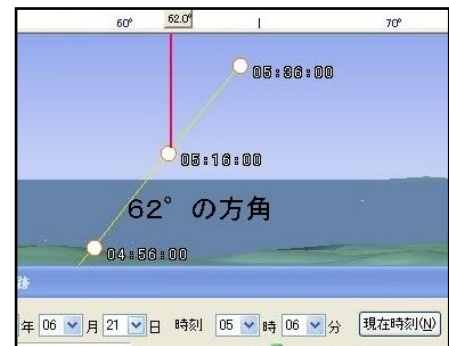


図4 夏至の日の出方角

ではなぜ、そのような基準を利用したのだろうか？  
夏至の日の出基準の方角を採用するメリットは、

- ① 太陽の高さから決めるためには、昼まで待つ必要がある。日の出基準であれば、出発前に方角を確定できるメリットがある。

- ② 夏至の頃は日が長く航海に適した季節で、魏使もこの時にやってきたと思われる。
- ③ 夏至の太陽は、北に上がって戻るタイミングなので、日の出方角の変動が少ない季節である。前後の1か月、計2か月の間で、太陽の上がる位置は5度以内の変動幅に収まっている。

このような利便性から、夏至の日の出基準の方角を用いたと考える。

## 6、貫徹している、魏志倭人伝の方角基準

魏志倭人伝は、倭国の位置を会稽東冶の東と表現している。(治と冶については、草書でよく似ていて、写し誤りがあったと思われる。)この会稽・東冶から夏至の日の出方角基準で直線を伸ばすと、図5のようになった。先の大山祇神の西日本の平行線とよく一致することが分かる。

これは、倭人から聞いた位置情報を用いて、中国大陸の会稽と東冶の位置を導き出したものと考えられる。

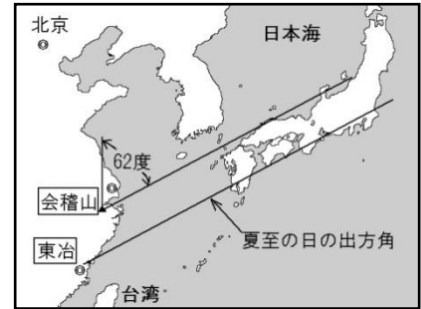


図5 会稽東冶の東

## 7、ニニギも知っていた方角基準

夏至の日の出方角を基準とする認識は、投馬国を建国したニニギも知っていたと思われる。

ニニギは高千穂峰で『此地は韓国に向ひ、笠沙の御前を眞来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故、此地は甚吉き地』と詔している。朝日の直刺す国と述べた、直線は大山祇神が太平洋岸に沿って残した直線のことであった。

この高千穂峰から、いくつかの高尾山を経た北への直線が、狗邪韓国に伸びていることが分かった。この直線の傾きは152度である。(図6)

西日本の夏至の日の出方角は62度であった。152と62の差90度は、夏至の日の出方角を東としたときの、南北線であることが分かる。これは対馬から壱岐への渡海を、南と記述した、方角と考える。

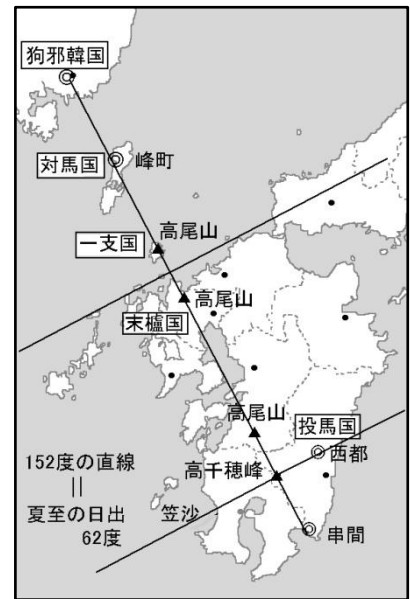


図6 夏至の南北線

図7は呼子港の拡大図で、夏至の南北線は、伊邪那岐・伊邪那美を祀る港の呼子三神社の真上を通過させていた。

湾の奥に松浦の地名があり、末蘆国の由来の根源地ではないかと思われる。魏使上陸地の傍証となる。



図7 呼子港

## 8、方角の偏向

夏至の日の出方角 62 度を東とすると、90 度との差、28 度偏向していることになる。東と呼べる範囲は±22.5 して、39.5～84.5 度の範囲になる。東南は 84.5～129.5 度の範囲である。南は 129.5～174.5 度の範囲になる。(図 8)

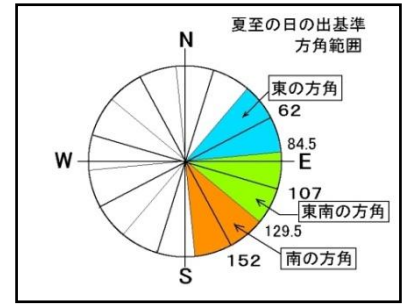


図 8 28 度偏向図

## 9、偏向値での整合性

魏志倭人伝は 28 度偏向した東西南北の呼称で、記述したと考え、実際と整合するか検証した。

「呼子港」の呼子三神社から伊都国比定地の糸島市細石神社を結ぶと約 90.7 度であった。この角度は上記、図の東南の範囲に入り、伊都国への方角「東南」の記述と矛盾なく合致する。

奴国比定地の春日市岡本の方角約 89.2 度も「東南」の範囲に入った。以下、宇美町の東、邪馬台国の南も整合した。

表 2 比定地方角への角度と判定

方角	夏至の日の出方角基準値	範囲	比定地の方角	角度	判定
東	62	39.5-84.5	岡本(奴国)~宇美町	59.6	○
東南	107	84.5-129.5	呼子港~細石神社	90.7	○
			細石神社~岡本(奴国)	89.2	○
南	152	129.5-174.5	宇美町~甘木(邪馬台国)	138.3	○

一方、「唐津市街の虹の松原の浜」付近に上陸したとすると、伊都国への角度は約 64.9 度になり、偏向後の「東」であるから記述と合致しなくなる。(図 9)

呼子港からがギリギリ東南方角で、これより南での上陸は、方角が東になってしまう。したがって、魏使の上陸地点は「呼子港」とするのが正解と考える。



図 9 唐津付近上陸として

壱岐から末蘆国への渡海には方角の記述がない。また距離を 1000 里と記述しているが、上陸比定地までの距離は 31km しかない。距離の単位を、短里の 1 里 76 m とすると、400 里余りで記述と一致しない。

この記述には理由があることが分かった。船はいったん呼子に立ち寄り、魏使の人たちを降ろしたのち、伊都国の津に荷をはこんでいた。「東南陸行」と記しているので、魏使が歩いて伊都国に向かったことは確かである。

一方「帯方郡から遣使が戻った時や、郡使がやってきたときは、みな伊都国の港で、伝送の文書や賜りものを照合点検した」と記している。この記述から、荷



図 10 末蘆国への船の経路



を積んだ船は伊都国まで進んでいたことが分かる。

呼子の港で郡使は下船し、荷を積んだ船が方向を変え伊都国に進んだものと思われる。それゆえ、方角を記述しなかったと思われる。唐津湾沿いに進み、伊都国と志摩国の間にあったとされる、糸島水道の中央部の志登神社付近に進んだとすると、75km、約 1000 里となり記述と一致する。

南にあるとする、狗奴国の比定地・菊池市や、投馬国の比定地・西都市もすべて記述通り、28 度の偏向基準の南で合致することが分かった。

ニニギが西都市に都をおいたのも、この基準で邪馬台国の南だったからと考える。

世界遺産となった沖ノ島が神の島と呼ばれるのは、この基準で真北にあるからと思われる。この基準が当時大事にされていたことが分かる

以上



図 11 その他の比定地